九数十寸鏡春日解　全

へ 5
4448

七部集十寸鏡附言

抑この七部集ハ我家祖松風叟の直授にして松家秘蔵之書にして祖翁の直筆也されバ規矩として松家にもちゐる書なり七部の注解をなすもの若干達雅の解ならぬハなし今然もいましくを是の家故多くは推量なる也祖翁の書に従ひ今こゝに古をみるにもしく今の世や門に派を別ち概術のもの概意をもつて来る因る此解を著す秘すべく決して此集中にある人杜撰といふ事を解の是先七部の解もるゝに其時を考され八つとして名つけて吾子のみなし集の続編すとてみなし集をよ延宝天和

所檀林の俳諧に行はれ事あり 其後俳諧末流なり
今日までの其の流れにて蕉翁正風の脈を継ける
故に余其事をしるし置けり 此書目あてハ蕉門の雅雑を
立ふ所に余が考を述ぶ 尾張名護屋の撰集の事く
芭蕉翁の文集之批判を以て速ニ俳諧を示す也 附るに
連句の風体なり
其書の事を委しく出来るに依て是又其の句を示し 第三の蟬吟ハ
総て五七五の字ニ而発句を助るの趣意 人の発句を助るの心を記して心安
きよりの考と云ふなり 芭蕉翁の別号と其流の
ある或ハ拝出の添ハや発句を定めれば納豆汁と之
第ハされど其ニ向ふ所有らし 添ハ我等が事て

独吟は前句あるハ納豆汁と云ふ事に依て作者の意
皆有しもの本意也 此書の趣ニ我文章を以て解する
第を以て述べる 而后人に知らしむの発句ハ何ぞ
脇ハ発句合体の理あり 客発句亭主脇と云ふ事也 花
の事也 何故なれば発句を客の前ニて述べれば 脇ハ外
別発句ハ客也 依て脇ハ亭主の役也 第三は他人の役也 発句十
分脇五分第三七分と云ふなり 脇の字義ニ発句を助
るの為之発句に因 脇の方也 脇一句の身のかたちに
なるべき事

脇四道

打添　相對　逆付　比留

打添とは發句の姿をとへて其かまふ情に添てまける
あり主婦和合のごとし
對とは詩の對句の格にして鶴といへハ龜松といへハ
竹と對する句格常に好き集物案し捌あと嫌
まりする事也
逆付とは挨拶なとにする發句之趣向を客より答ふるに似
眼下にして答ふる之平生人に挨拶するかごとし
　今朝ゝまで寒き音も此森や門の松
比留とは物代白鬼輿老独が案因也是を根にて訴し
めを諸て鞍の乞夜

訴ても其一ツとも鞍の手に無之哉中にのりなくといへる
其逆付にして称辞也
比留といへるも發句の事を見定て其詩と寄之
まて比の字好無しても比に通ふ也
　春なくや人をかへ此伊勢参
　　採出ぬ中馬長く遠
採發る弥生比といへる付之
心付にいへるも前句のなへ格にまかせ其外字眼柏子根
二句一意なくしまかへく主也
字眼といふは發句にも続しかへる字を根にいつくいふを
云也

きこゆる君よこれなる霜の松露かれ
日を寒かれと去つゝの寄る閑
此句是は書露にいふ我常に必ず則閑の字
を坐して字眼とするもの也
白雄房の寂察に曰
この枝折かゝる世の秋の暮
淋しさげ月夢の遠里
是は場を字眼とかきさへる也
こゝ株や水田のうえの秋のくれ
暮この家々代々の寒る　為
是時は字眼にきそへる也

此説甚遠しり句論白雄は岩沢しれとは京都
祖翁の柱のおもむきしも梅遠の古き好みてへ
ゆきく初説の中をよく此両説のとく去り
字眼の説はさしきり一句もなし字眼とはいふまで
去は形去しのかし
楷子説二句一意をとばゆる説は
去のしし此句は此句此句に知らされ
蜂鳴やとはゆる笠の山菜哉
是を知らるれ
白扇や坂東道廿八里
蜂が中うけゝる二句一意の説なれ
もし是めで汁出る紅の烟原

是指子にいふ事ハ二句をひとつにしてみる也祖翁
もつはら此を嫌ひ給ひけると此謂なり

前云

前云は発句根の心をよくいひ流したる一轉の場也此句
始より其許を求め出す所なり句ハ未だ付くる作意心得ある
へし

祖翁曰前云ハ前後上の句の如くして四句目ハ心付る
ものなりといへり是故にいひ流して出すへし
十餘の句にて其発句根よりの根句出來てハ付る事始の為之
根の句出来たる前云字出也是より五字にて付る
その下五字よりの根をいふ也

子規　杜若　弥月　是等の時候も
　　　　　　　　　あり

さみたれにや蕉門は心の俳諧をきハむるによりて
切字入るも入らすもいふ
祖翁は唐崎の松は花より朧にて発句と前云の間を知る
へし

唐崎の松は花より朧にて

是は唐崎の松も花よりも猶朧にうつりしと
落花の句は発句也

朧の松を春霞とみて

是らハ前云也といひつくして心を付る故也
すへて付てをぬす又は接の手とれ紙ぬるへし

皆句毎に汁を写しする句法也
　奥の山本。日もさし（る）
山の松風。袖吹ゆく
又句作二通有
　古山形　杉形
これ等形也
　夕露　染物にして帰る霜
初は染物のとして帰るとむと作し扨夕霧と
上よ絹しむ山の山を重ねる姿扨古山形
といふ也
杉形といふ也

　むら雀日和定むる垣の内
これはむら雀垣立てし上下を作し中く
日和定むると入る也是算術杉形の法よりなる定
算にて百句の中に置ても分にて写る極まるを是
　蝉も未定まらぬ帰り雲
是句と分にて其形る変ず一句落葉なく云残し
何杉形に付にて云
　蝉も所に定まらぬ帰りところ
形ま杉毎の字落葉なき杉形なり

七部十寸鏡春日解

南總天堂一叟著述

校合　萬年舎貞斎

仝　湖月樓東烏

曙にむかへ人々此戸押あけて熱田の杜すゝ
ゆふぬけし秋さへうしくなき聖切法花経の
うてもてえんかさりていと出家也年五の枝折
おけ足竹墻あるもてかはる立家なと往ゆきと思ふ給ふる
年五つ信性雲井半七君護なき郎かは足尾むす
系別荘在

一書ニ清少納言此春も曙の中にしろき紫たちたる
まぐのことなるを岩路とこそ
書五ヶ枝折おかる草植ありとしてこのまゝ
白氏文集曰五架三間新草堂石階
桂柱竹編墻　なるの姿をいつるなる

二月十八日

さくらや人さそひくる此あたり　荷兮

桜咲く中馬車ゆく道　重五

岩なる文のおかれおきまつ熱田の宮此郡のまゝ人
の鮮さかるに親くきこゆくといつる千歳の感なく
葉芭蕉なるめ十余の小僧連清とまし　若なる安道者
羅衆以の声高く大殺しめく辞にてさまし
此詞のきまになり
揺る花く連く大勢の績くさも桜ちる中ともに一句
也くまされ指ちり打ぬまして此揺也

山霞月一時に　館多てく　而相

此中ニ清き山形ノして付る馬花く連ねしるる
ちり藍清と一瀬しそり桜ちる中に秀章より山
家と風流の絶京在

鐘なのかね雲にかゝるなり　季風

此四句目花句ありと云り　数代なる軍用相手ある

をだしてもしく四ヶ目ありけれし此ま行へるあり也
当輯き備之
汐風まくし　宇須八郎峰　昌圭
曇り行沖の岩並く見え　執筆
汐路ま海邊軍場の寒跡をとゞむる附也衣裾汐
のかゝりくるをも軍卒並幸君余情まみる
曇り行沖の白ま嵐を付之
汐戸寺の汗の帷子脱替む　五
むかしく涙留を以身くく　写
汐戸寺ま其場の付すりも汗をさらりと也　若
行る寺を出して極點を付よりそもとよりも本寺らる

もとよりも涙の留をいくこくとる諸人の知まる郷
も青葉洋卉の留あるべし　葉二ともいふ
是て初發の一より思ふしき附也さまあらん
前句更のさまを以て巡る句の案風行りぬへき
見合ねめていうまくそをたくみ其坂行　経行
志てしまぬ袖を婦る意後年の製之
文王清書中しまかなる古く畢　風
ゐあり常好角の好まき学　相
此書ゐる術作にて入ても行らし汲家宗の秘說
七線廿箇條のひとまきさ集め別傳の書まかくれも
執心の人はまる授るべし

肌寒し一家に背を打くし嘆に　兮
琉球気をとうし見　晨明　圭
肌寒の付なり鏡なりて一家に骨を打くしといふ見
るゝに寒紀あり悲情の前に用ひ鏡しゝくるゝ所なる
のなれも用し野道の学以津まで一家に生死の
親子のうむやと慈悲なる鏡秋の付之
次の琉球を一家ハ骨をむしく学り行きなしまさる処
河州の勤めと其銀しうる人を完なる付之気を知
其琉球に作しうる故也晨明に肌寒といふ付の事也
寄掛鏡う人の影うちまく　桐
口なし水仙まで法楽里　五

鏡の付なり琉球の用也晨明の寺の寄の頃様へ
所に替る形家影うつすにたる命数の付之
次に鏡を神鏡と見立て影うつすと大勢と行
うやし神楽ハうつしたる御霊紀の付也
寄居なり半夜尊影ゆりて　圭
此鏡ハ縄合八幡なる社より社檀也十八丁まで
此所ハ二星引て二星とるふるかしまで花のいひ伝
花といひ他の神社にはなし去
岩井の神社まへしは有所の付にして別に
意味なるはなし也
花に其男も寄銭なる比　兮

柳より鞠をもてる鞠あまたや　五

花になき春の几巾揚る時節の付なりし
其場より好附知らも他は活法なり小児の上なる
折からこの趣未男には我あそきすくなからし
此句花はたよ上の句の柳を山家も鄙の柳として
新たに鞠がり里に柳より几巾なとを揚て
居る様とふへる付也是ハ古人の修辞付ハ修辞也

入のる家日に蝶ハ飛くあり　分

うけのより麦も家々家に連続て　風

蝶の付も気色付なり柳の夕日と形容をしえ
花を述るとも其場をと云上手にて来る

春なり一段趣也

此句は場より付く也といへる言葉を守りなきを連
句風情也麦のかへる家々をかしき中につれ付て居る
のゆかしく妙也

新みえて鶏ノ探　相

黒髪をかへ結ひ乱れ切張し　分

鳥捨ての探字ある鶏の付也に探りしき中に探
字といへる実況也に付けのままに字家なり付ては死句と
言ふ字なるに付けての中にても探の気に幾人なる風情
法法の妙変也黒髪なり其人としていまにおくる結ひ
探家髪の乱まし入るる風情あるなり

早稲田大学図書

いつものまゝ五位の職立　圭

杉木は宮司か門を傾けて　相

五位の立は向人まで句を女之蒔妻杯入道
宮といひし頃まで其句をあまた作れり
職原抄に云職掌七位典薬頭は昇て五位とて
大宮司が職立の出入する場所也大原医のつとめ
むきをいへる事数しき事云薬の宮司付て
取る之門の修理宮司は法法として是を負写の付
といふ

ならし給かとも云ぬ時雨哉　五

朝顔豆腐が寒さこそれなれ　圭

門の文むきし称にて杉は偉る時ゝ緒く時節
の附出し也緒きむしき称をのせたり
此次を世節のあるや是句作者よ不可疑也然時
各くの付で斎也
まりあるまで云深して、てみえまりしてけるが一段実く
抄やどか忘を称すを欲辞也

念仏申けよ称あまつ辞也　風

穂蓼生茶を作居にて挽して　山

念仏の句にて豆腐の用より附出したる座料之
茶は作居の付にて其場よりして穂蓼を一句付とりたる
かまり也

我宿を橋から出る月　竹

傘のもち手にて出る比なり　風

橋の名は出る月と出てたる中比能登守にて木屋市郎助と
いへるもの米商売せしに甚家の蓄へ有り横切る堀お
り深世の通路りに寛政の中比自分に橋をかけしり
しに天変地変のそこに樹を立て洪水のため所の破れ
の橋り身代を橋に費し終に家妻一小蔵一ッ売払ひし
住居となりて其さへいくほどなく代替りて衰えて
刈ときれし時の人も皆鼠橋と呼なりしかひとりのや
此橋をめでたく存して後嘆悪年にて後不丁にて建

里外俤をしのぶ也
橋といへるもの当に傘の風情をおもひよりて橋をかけたるを
にありし名所也

鉦鎚おもてに出家なりし　相

おもてに後雨りおりに寄讀中也　竹

る善にもより物世鉦鎚をおりる後をつくりり姿の
おもしろき也
おもしろき僧の子觀をを耳て雨切をふくる
よまむそのく他よりみえたる也

鉤雛ひとは代二人してつけ　圭

世に行きぬ居波に年とゝまりて　相

稲雛のありて坐る場ありて半院女西行法師ハ歌よミ人
といへる翁の句聖西祀りて是に事言紙作りてあるむ
世にふりぬ庵の古き世に往徳なる真人の住所にして
多くの水の浮みも此所の祇王なとの住む所なりける
記念に庵を嵯峨の菅畑　五
かくて千代の八つ越て其杯にはへりける菅畑と云
ものの名跡のおもいして此所に仏尼なとの住む
所なり

いく春を花も咲かぬ笑ひけり　圭
貸も見かけ見かけり　風

白花菅畑にて此の所に等しき日も古も昔と
称せる風家の作意植なと作る竹花峯白に移り
来たりといへり乃花を千代の跡の姫おもひしらん

三月六日聖水亭にて

来る坂や畠打山の八重ざくら　旦葉
おもしろい雲む寸くの糸　聖水

霞ほ坂まで一君楽若坂ほとりより八重桜の居所すて
畠打山の名くかりも八重ざくらむと風興ありなん先柔
去悟やと云へる五文字にかける心なく霞は此趣京を面を
ひとや六葉よりて賦の緋之葉る八歌と古くの五文字数

まことに組五文字掛けて風景を集めて事之
なり山や明石浦のけしき夕涼哉に桜花葉此等の
景物にて続くる汁なと見なり
組よく其余色紙達さへ有るは続くる事也されは
続る花なりし桜に続きと対して面白く露と云る幽玄
の組なり

春の旅花かさむ鴉花く　花守
　いすく毎よ清む信て　越人

春なかきみちのり旅行と将て桜狩の気色云志して
いふ花なりし鴉花し人の住ある所の其日
に思ひ旅情をつゝむ情の事

四月朔日く続けつゝ山にきさ清て善暑の
旅情を対し

松風に倒れて行く酒の酔　羽笠
　売残したる雨をかつ　執筆

松風に倒れたる酒は句の作意也清水より酒
のみ酒の酔は其句の本心なり老人にして酒に酔ふ
さもなく酒の酔と云し時の字心をとゞめて
売残の雨を桃に続きて酔人の心なるゝぞ面白の文字
とするに仁心にして句の作意に行心を考へ合ゝしも

笠ぬき主果気もなし　乃言　氷
　菜かる垣すよは子の末の室　葉

笠白ハ古簦来る日本紀曰仁徳天皇四十三年百済
國之王子蕃酒公鷹之名匠也雄略帝之時帛紗献ル
故太秦姓ヲ給云云
うつまさ家る九月十二日年来之云ふ所ありしより
よりゐてはうらと云きく人月の身之笠ならすら佗佗く
葉あり恨こらけ季の相貝面かしより乎てゝ云るゝ
壮年の花君ゝゝの此あるゝし
　　表町壊之て二人誓おゝむ　　　人
　　暁りの車挽来し　　　分
表町中川うちよ此子のえて気こ以ある人也家子愛て
二人世を遁むるの心なきものなるゝ季
入ル十五

暁りのり車挽すに云路か亦て此身之家ハ帝女
の果辭を乞ふよ暁より々ぬのしく来なとく挽ゆると
歎しつゝいつのまに此愛が華女を逢むその身之
　　鐘聞て大津が渡りて入まり　　　葉
　　前の母り聞む我士の夢　　　人
鐘負てある車引續け暁おゝきする常しくれ姿ゝみゆく
年用意の鐘負てのゝ付る季大津ゟ京の合まで入来
走る角出るなり時の信まなる
鐘も鳴ゝも別るゝも逢も大津の孔ハ法玉の変る所の
中よ何かん恋ゝき国犯りの聲之き付より
　　嫁花に何ゝ万斗の樹なり夢　　　笠

藤かゝり側も第日の京　水

据衣の付にて起情也我等の事くいかゝりなみ合せく
ひく夜斗もいる街の霖莞おもしろく大盛の附也
第日前京にて淺緑にみ梅金式あるよりさまにや所
き信者の京語と第句哉にて藤かゝり側もあると
大物狀を付る事

里人乃第を旅衣我乃苗　人

月無き浪ゆかり御橋　筐

里人前付にて第日京きての付合式あるによりて旅も
きよ夜あり哉かれを里人の能もかゝり付もして里人乃
旅よそふ者姫路の市書也

江戸并句日毎に湧るさうより洪水となりて重
石おく橋とも付たり

花頼のくる本根に花の結ふとむ　水

風薫る春の湯のやま　葉

移りゆく木枯も側まゆ末也夏のしら浪根の底出るこ
花の結ふとむといふは風流也付にて橋への重ならう也
結ふとむとまうし絶まる春はまそ哉付にて湖もまる
まうもそり湯泉山狭現にて捨て居馬湯治場にて

のときりや飛業比扶伊世の帯　人

内侍のかゝりむ代との眉の圖　守

此毎句にて右也前比箇條の秘説放別作に著も執仏

西かくよりも授ける事ハ祖翁の口決なる事

物思ふ軍の中は信はぬり　笠

君も勝栗ちらす中よし　水

内侍の情まじく此句より軍中を思ひ寄せる有心の
付也句当は内侍のよし真に引まず思ひ居る体の附也
名も勝栗なと軍中の詞にして物思ふ人をなし
済く世話なしの風情也
一説太閤秀吉小田原陣に甲斐の山中にて村長より
栗代献るの事ありき是ハ実語にて俗説にあらず

大年ハ念佛唱ふ夷振　葉

独り安楽になれる情也　人

大年は念仏も前くよりのつとめにて夷振なる所
念佛めくし
済なる念仏の信者夷振也念仏申せば正直一遍は
人となりて物事安楽にしてよからぬ附さる

敷く葉の菊に抱花流　う

数ケ弥日までに紀妻は総　笠

敷く花葉を抱きと抱杞垣の情をなひ風雅にして
よき情と付けり
くて垣に行るハ数りまで其の車早く書物ならも
数より本なるはやまといかる鄙の情の
風情を付けり

一夜ゝゝ寸霜に写す洞になれる　水

さらに亀祭る石文民の月　紫

都よりきたりても素粉に早さいつきうけて物多
くちやりゝの古称る田舎さの辞を付たり一称多き宿
いとまゝのけうる此句よろ同る姓さまて何るまも
都の瑠璃ありぬると付て爰ハ歌舞の比付とと
いふあり
さらに亀祭るとめつらしき秋月の亀祭をさとさとり
田舎さまて古代の風残りけるよし　流暁の付之

如思種ゝ重之来　年ゝ年ゝ云度

二月五日子刻来　翌午刻帰

五月十五日両刻来　翌巳刻帰
七月十四日卯刻来　翌子六日午刻帰
八月十九日　九月十六日　十二月廿日

陽にゆかんと付まゝる丈婦まて　人
さらる高の袖の涙の歌いつくし　子

魂祭すゝ老丈婦の以さゝ長紙付むとて後前の勝
残さるといゝる句作おもしろし有るは無ゝきれる
語也心細さ亀祭のさまゝんとるあし
送るの句若令のめてたし老人丈婦を全く席て
あさハよ賀の傍下さるゝ辞也是ハ季高の袖ゝ一般
其しはおゆうらし第八洞ゝ涼風情有

田鶴なきて影ある里に出にける　笑

ちからなしを緒し井の子　水

田むらの麿と申せしは一條の風流也老人なる位格抵抗有
花の里に生れたる幸福を得たり是も又萬里の北付也
然ハ生れたることに申すにまかせて世人の附たり力の御れしの
東海代々力ある家とし知られたる

漣や三井の末寺の結びけり　蒹

高低のくりし雲行山々　人

漣やの句ハ大津に云る江沙井の寺の後に移る源三盛安
遁世して志賀の慶地を再興して盛安寺と号し於候
も是崇福寺の旧跡をうけたるハ結ひつけて作しける句也

然る所崇福寺と三井寺とハ別也山法師寺法師
何れも古代にハ英勇無双力の御強しといへるにつけて
三井の末寺の結びけるに附けたるなり

つき付て時十九日の月をまつ　等

君待つて見えし記されけり　笑

廿九日月まち附也月も廿九日に見付たる
又俊君の一大善也阿佛の十六夜日記に十月廿
九日の日に見へり縁根山にかかりけるに廿九日記月也
是を見るのみこそ悦ひ付たり記
君の勤に油断なく此事を暁おきの付也壬生忠岑か
家の天秋の清継にそかかれけり記のつきたる橋の落れの上

浅草寺のうしろにそこはかとなくいほりむすひ
たま〳〵訪ひしける夜なん
忘れ翁の狭衣白花引揚るとて其次の句
峯白の心まて見えしかは余興のあまりに書とゝめけり

三月十六日且藁の回家に泊りて

蛙鳴て耳くゆしき森光家　野氷
頼もしいとゆかし春雨の漏　且藁
ゆかしきはいはれも見えぬ兎に殺（ユキシキ）勇ゝ殺（ユヽシ）優ゝ殺（ユヽシキ）
あさ花さくらなる野氷且藁へ挨拶句をまゐらせし向ふに
世の中の夢も寐ぬるさやかしき蛙の声聞なれて

脇を据ゑ後に發句あるへし
猶又且藁が挨拶にて織りに雨も亦さ黄昏る泊せ之
額に雨も打ちかゝりてさきらかくの發遅退也

巖窟なる岩木の奥きさ翁なりて　誠人
まれに人を見なる馬に乗子　花付

此句は誠人の会輯しけるにも宜く定め雨乞にて
すゐかれ比の前に之也岩木も九世に及ふといへる
雲かくる云その奥なるよしあれと奥き岩かゝ賀
家の躰を作る心の奇之也祖翁の雲身嫁る巳の
指むかひつゝも岩木之
此句馬乗る人踏し上山家の躰を今に判

まじくといへる姿妙なる句作也

立て来る僧しの来ぬ月影よ　参文

芦の穂もさゝすかつくまき汎鴻　執筆

いふし新まで古き合なる物付也　島をまきる

び出る也

芦の穂ある水辺より附出し　志田の句なれとも

姿なきくるしみのなしとよし

蜘蛛は能縁鬼丸蝉の来りて　葉

岩波の吟よみ花咲き里　氷

傘の端といへる立並て姿よみ花の咲く人

比党也なる附也　此慣三句を附し　悪く句海

芦も水辺の用なくいはし物に蜘蛛の打戯を

来ましかくる

岩間寄より織る蜘蛛の糸鏡なり　姥山まで行き

此岩ヶ峯也と云ひ常念寺帯　志波の浦

打てく心なきを書きて付てくれなく云諸て　堅説はし

てとくなるとて其句をまでくともよ絶なる也

見るに花咲打とまて傘輪しくる付也　如此まて給の

花を撞損よきや鈴のきくる付あり

為新月も離鏡せりむ　幢り立　谷

ひとる　此るしも旅の一ツ月　人

離やくちふ花よりの附出し　走て後葉とも志波蜘よ

歌ハ人の心によりて出るものなれハ之
深き旅行の夜寒を起情して宿寒き旅の思
ひ出り煙の川かゝり恋しく宿る旅宿余情にあり
尋よる坊主か住す後結ひりて　水
解なや松うも枝結ふ松　文
安業ひなる松と以て紀行新書此宗家尊られたり
翁にや力出おこしたる新代付たる之増給ふ之
能きとて以て宝庵に縄下したる也
枝結松も門弟の松にして宝庵にかく非情結
こ結も昔しむかしより歎息しける付之仁恕をゆ
称道とこそとする事也

同云此枝結松を釈解すむかしより岩代
の松をいふなり又古注文字ありのことくよめる結
飛ひ結ひして根葉の垂様と遠ざかり蕉門の心
結飛結ひして根結ぶなかりける此発句にも
いかにも岩代の松付ありて行て於ありあれ
贈答結を寄する岩寄云指也

岩代結松歌

岩代の浜松か枝を結ひむすひ
まさきくあらはまたかへり見む

白雲たなびきて世をむねかと

同十九日茶会宮にて

咲かけの菊すゝ松や白露そ　人

蟋蟀　和名はたおる　時　葉

蟋蟀の初秋なる機窓の声より忘るゝを哀れみ
よきてなかゝりきくよすから一色のこゝろをいたみを
さひしさにつゝき秋夜の題は一色なれとなれと
のかなしさを深く感じ松しめたる也
源順は嵯峨天皇四世の孫なる勘解由判官攀（ヨヅル）の男　能登守
従四位下也　和名の達人梨壺の五歌仙古今集
の寄人永観元年辛未七十三自然智の人なり和名
抄著
きりきりすは機織る蛛の字来歴にて
和名抄虫の部にきりきりすとあり也よしなり

秋の初夜よりかゝる時節を聞る也
初夜も夜よりつゝ声を聞け　文
別れの月に涙なし也　分
閑居幽栖のさま也　和名抄あるかに茅屋かなし也
こゝろに深く寂莫実に感深し初夜の
夜の字解されより多情風韻全編の什之
深き遊しさより名残の月をあはれみ人も
秋しく下知也別れて涙なしとして見る
く句絶しく名残の秋也
旅に出て四字よ…　葉
春ゆく…　氷

是ハ八百重清書なり 秋より春にうつし来ル
文をとゝけも更季乃御才妙なり
先語に四宮の遊女なる山門の児北庵論をときたまひ
時清秀し四宮庵論と云ハ四宮八大津也
其身を別の府と云より一段書るゝ騒人の
きぬしに歌書をなしといへる也
彼の春は道といへる笠の橋子行き方旅綿乃
身まり月と花を妙といへる御才恵を
　永日やふ紙を鳴る凡器る露　字
　　蕉子笑まるさこゝ多れの中　人
永日の一句実に能き筆しうまた紙すきの中に

八九廿四

此外題を付る事善悪のさたなき也
絶る永日哉といふ詞にてさしつかへなく宗匠る
永日と題を出し蕉子が永日を説く中也
　紹鴎か飾も好みて用る　氷
　　先数の茶を好めるといへり　文
一書に武田何某の伝来に芭蕉して古茶家紹鴎といふ
東山殿より伝えて茶事を嗜し其人を利休
の師として京四条夷の家より猿子教へに大成
庵を号すると　和漢三才図会に在り何をさゝそ
多れの永きりけ難のこ好し用ゆれしと云
ゆる永日秋後る勅之

ゆく紹路にかく垂のみちまちかねしところへ
よりまき歌の席ともいはるゝに以て深葉人連
歌坊なとの哥しらるゝ折く
　澤蓋り紫拝まけさ書てあん　人
　岩苔かしらは露りまけら甚　葉
滝蓋り葉加しうなく此徘書実給あり
丹陸持ケ上ケ議紫の清御吉田家ニて御連哥
なりし時女房衆内侍少将内侍左近ゝく衛門督ま
徒なりて民部卿入道の房の中次をて清水の陰に
桐のを違ふ事の年撰ニして露の露得く頭申
合てヘ年参りまいる事るく法まへ御いのちゆ着きりけり

行くよ岩蓋少将山より紫を折て澤の房へ送りけり
あくおくく待り書まいらて水の書を罪でき　かりけり
まかりしこ
さ法のより此度事なく紙すれ不附としゝ安徳之
岩苔といふ紙御まお澤蓋とかへまよ原山幽谷
のさいか　お紙よそそ　待より　新なくしまつまいゝ
つ紙て附る　附て年一般張君ハ御骨新之
平綱岩石苔ニ生大石及水間ニ倍許　青翠ニ当草
茸タル者也似苔ニ非苔此則石衣也長者四五
寸計蓋ニ依松ニ生ニ石上ニ者也

むさしのに庵をかまへて世をのかれよ　文
蓮或杜子譲り家居　人
むさしのゝ人世人も重す居刹に逢ふて庵をくゝ
それ諸むかしの也ことに浮世を捨て新居を
糸のけの葉をすゝむること之花咲月といふ
涼しき清き嫁ぎの人と称りて是夜紀事
謾録集編す諸母紙会之也ことに蓮歌杜も事
見るのみ得かたき新居の方丈の記なと為ひ合
せて

あきらけき花をまつる夏作り　葉

葉折を遣りきぬ八の月　氷

八ヽ廿芸

方丈の記云庵のかまへ少地をしめかき根をめくらし
垣をめくらし園と名付そ高く岡の紫草たかく生ひて
隠士所得の定家の内やなれぬるとまるに麦ひし
作りまつ雪となる風流の句也

雲居禅師の寿に

豊積の五月をはなれて寿は庵
茶の芽やすへし翁かへりそそ

茶折をそ遣りけり遊人のさびしけりの付けて来給へ
作丹をいふ作者枝にも当家素行中打出まし
脱稿也

風のうち紀録の日和り細入よ　竹

秀羽のうまれの漏きらひ　文

素折嵯峨為ることさる前句の姿なるにて旅人杯の
艶細く付たり是も素く作く對する付也
文章にては双関對句なと云る格也
次ニ一将ニて前句細入ましいふる語よのりて者
当りにくしハ雪相の踊子あり也と云るてま
後付り格子付たと云也此の夕暮日乗り細のよ
画情ふ移て雪相の踊子ま移むと計と彩ら
せハ見るなる也

何となしなきこゑね筑摩祭過ぬ　水

つゝく一羽鶯の鳴も声し　今

踊子ニ手拍子入れを女ともへにつき出るたる鉢剃也

ハル　廿七

まる也向付と云ふ者は前しれるさきこゑね筑摩祭も中る事と
踊子ニ付たるを前句移也
鍋混康之云八幡大原ニて前句の男女雲會
席ある計して結ぶる云江州朝妻神社ニ筑摩
祭を四月朔日江州坂田郡也女子男と合ふる数の
鍋を頭にのりて出る也とく
世上結ぶ相を云ふ何其の女を傍筑摩祭の祭にし
余結を清くして難有くありけれハ我もふ負の
心を隠しつゝく一羽鶯の鳴もまして云ふる付之
つりくしも思ふ詞深く男女親しく寄詞之是也
其對の付と云ふ前りて對する也

我春も若葉に逢ひて　人

雖も喩へ君か代　葉

老のよはひ年経の備へよ一羽飛ぶら若れ

見しらて我春若水と飛ぶ前丈人の身之

筆帳増えのちる時より第の家の有様きらん侍

るなり

山も花處待ち遊ひ　文

ふたりて見しき雲雀ゆ之　八了

山も華も芯也空に遊ぶに解けて初めて

ゆるも何も風雅の句作也季の句より行方侍る

追加三月十九日舟泉亭

山路の行人さまよひ組のこと新九れ　誠人

蝶水行きかける　岩楢　舟泉

若句ふたる通子細なし　総て時候を含みて

蝶の水のみにおりると作なり山路に蝶の打添之

如月や解睛す垂れき重みて　聴雪

行幸のふたり洗出器　露鉄

夢に依るの蝶に解けて雪ふりて　岩楢

を深山の雅として新作也

解睛と云ふより行事も通りてありやこの

心なり也

新日城慶の川雅治のいはゆる　荷兮

月無き空北門に向ふ音　執筆

発句聊かなれハ別本ニ書班治出でたり辞を
出したる事習ハ正月依頼を別に二月に加賀を
慶次之月御発句國をかへ書いつ次第を譲
えつる句給はりたれしまそハさるへき班治の辞之
次第ハ聊日此つき願ふ月を見空となる也

十寸鏡春日発句解

昌陸の相ともらぬ御代暦　利重

昌陸は里村氏なる也あらた元和年中の人也
年々正月十一日柳営にて連歌を於
興行御毎年代々法眼位に任せ
元日より來るの競馬ぞゆるし　重五
思ふ日より驕の袖まで見るもあらたる時静に優
なるも競へもゆるしめぐるの来るハ相句之
魏駒傳云人間一世如白駒過隙
それ暮行遠きし牛の無き日哉　昌圭

物皆新に其理甲戌年なれば通し安く静なる
気色あり

門ハ松茗荣園の雲霞し　舟泉

門に松の有さまハ切中にても裡に茗荣の霞
ふつりる雲霞して松の影いさむ気色の作之

鯉のぼる氷の下のしし梅白し　洞窓

白氏文集に梅発頭年鯉魚入新門
此語にとるなるも梅ハ雪花の姿此いさむ
ともに鯉見る作也

堤の人無牡丹露ひらきけり　拉国

春の端の人無ひらきの如し露なる中よ冬なる

を以て白ふしてまいらす往字払まてかけり且窓
残月しける也

櫻咲多元日きのの眺より非　摩夕

元日の櫻なる辞也山櫻に櫻まて花ても寒くて
此より豊なる氷の気象也

星まで落し夕暮ぬけ人の四方の色　杏霞

四天より縁なる春色寒くいまで契ても世合のけしき之

けふこ毎も小松負しむ牛の首　旋雪

昨日で立り小松負ふ牛の家とまて今も晩ける牛の
又まてむく種華しては牛の首いそ報しける
祈り

傘張の睡り胡蝶の宿り哉　重五

先是ハ辞之少しの油断に嘘をまことにいひなせる句なり

足跡に桜を曲る庵二ツ　杜国

是ハ西行撰集抄に西行上人の遁世して庵をむすびし跡を尋ねて遠くあゆみて其俤を偲び侍る様なり

様まねかぬさまざまの人の伊勢参り　荷兮

まねきまねかぬ様々の人の逢ふ事は顕れたる句法也さまざま氏まねく様なり

猶やとぞいへる也

山畑の茶摘をかざす夕日哉　重五

八九廿七

是ハ死活の法也　茶摘の夕日をかざすといへる故死句也　夕日ハ茶摘をかざす活句也　山畠ハ有の姿也

武蔵坊をとぶらふ

珍らしや寺の衣川　高秀

珍らしき山伏の法具也　夫より衣川をかけたる句也

大僧正の某弁慶むかし衣川にて討死せし

時をまた一名小でまり　弁慶此姿を云へる句也

やさしき[illegible]のやう

名月や寒き[illegible]　雅水

名月や寒き[illegible]に新宮の[illegible]之

ども是を見るにあきらかに不破の関屋に對して
昔の旅をしるし書き其風流く家も秋月
まで雪あらしといふ心にてもあるべし
八雲御抄にける藻塩の煙とあり
是ほどて見ゆる月見哉　仝
一本よりも是まで[illegible]たとへは[illegible]
意味遠くりたる[illegible]にも[illegible]
詩書
春ぬ[illegible]泰[illegible]見ゆるかな　荷兮
是も[illegible]
此例の句法也

雪於京葎の子乃落られ　昌琢
吉野の萩を子ずり落しを書き[illegible]建て[illegible]
葎[illegible]の子[illegible]の落[illegible]
[illegible]風情や[illegible]

十寸鏡集目録